

■ 研究ノート ■

別府と伊東 —アジールとしての温泉都市—

島村 恭 則
(関西学院大学社会学部)

日本列島各地の地方都市の中には、温泉の湧出が都市形成に大きく関わっている都市——ここでは「温泉都市」と呼んでおく——が存在している。大分県の別府市や静岡県の伊東市などはその代表といってよい。筆者は、2010年度先端社会研究所研究プロジェクト「共生／移動」において、この二つの都市をフィールドに予備的な現地調査を実施したが、そこで確認できたことは、これらの温泉都市には、アジール的な性格が強く認められるという点であった。

アジールとは、「聖域」を意味する言葉だが、「元来それは、避難所といった意味を持つ言葉」であり、「犯罪者や債務者が、自己の責任を免れることができる場所」のことであった（奥井 1996: 10）。もとより、現代の日本において犯罪者や債務者が免責される空間は存在しないのであり、厳密な意味でのアジールは存在しないが、主流社会から身を隠して生きる、あるいは主流社会とは異なる論理のもとに生きる、といったことが比較的行なわれやすい「避難所」的空間は存在するといってよいだろう。

社会学の立場で日本社会を対象にアジール論を展開した奥井智之は、アジールを再定義して「不特定多数の人々が集う一種の聖域」としているが（奥井 1996: 16）、これにならいつつ、ここではアジールを、「不特定多数の人々が集まる一種の聖域で、主流社会と距離のある生活が行なわれうる空間」のこととしておきたい。以下、温泉都市が持つアジール性について事例を眺めてゆく。

1. 温泉都市別府

温泉湧出量全国一位の別府市は、『豊後国風土記』（8世紀前半）にも登場する温泉地であり、近世期には湯治型の温泉地として町が形成されていたが、近代に入ると、多くの旅館が立地することで温泉都市として大きく成長することとなった。その場合、旅館をはじめとする温泉観光関連の生業は、別府の外からやって来た者によって担われることが少なくなかった。

たとえば、亀の井旅館（現在の亀の井ホテルはこの系譜を引く）や亀の井バスを創業し、近代別府温泉開発の父と称されることもある油屋熊八は、対岸の愛媛県宇和島市生まれである。またこの他にも、愛媛県出身者によって「伊予屋」や「宇和島屋」といった名称の旅館が創業されている。旅館以外にも飲食店や商店の経営者にも愛媛県出身者は多く、旅館従業員や種々の観光関連業種に従事する労働者にも愛媛県出身者が少なくない。

筆者は、別府市内で数名の店主や旅館従業員（いずれも愛媛県南予地方出身）からライフヒス

トリーの聞き取りを行なったが、そこでは、愛媛県、とりわけ八幡浜以西・以南の南予地方の住民にとっては、県庁所在地の松山市よりも、豊後水道を隔てて目と鼻の先にある別府市のほうが近く感じるというコメントが多く得られ、また、愛媛から別府への流入の傾向は現在でも維持されているとの説明を受けている。

ただし、別府への人口流入は、愛媛県からのみではなく、九州各地、とりわけ福岡市、久留米市、宮崎市方面からの流入が戦前から見られたようである。観光地理学の立場から別府温泉の形成史を研究した浦達雄は、「別府の初期の旅館経営者は、素封家や先住者によるものが多かったが、明治中期以降はそのほとんどが外来の農家出身者であり、いわゆる立身出世型が増えてきた」（浦 2006: 44）と指摘し、大阪市、大分市、臼杵市、八幡浜市、下関市、福島市などからの流入の例を紹介している。

ところで、戦後になると、これらに加えて旧植民地等からの引揚者、あるいは他都市からの戦争被災者の流入が大量にあったことを指摘しなければならない。別府は、温暖でかつ空襲を受けておらず、また進駐軍の基地（キャンプ・チッカマウガ）が置かれたことから商機もあり、多くの外来者の流入が見られたのである。

別府港（現在のゆめタウンがある場所）から別府駅にいたる間の市街地は、戦争末期に疎開地に指定されたため立ち退きが行なわれ、空き地が出来ていたが、この疎開地に戦後、引揚者や戦争被災者、あるいは在日朝鮮人等が仮小屋をつくり、闇市を形成した。その中でも、とりわけ海門寺付近は、「別府カスバ」「魔窟」と呼ばれる場所だった。

別府で生まれ育った作家の鬼塚英昭は、海門寺付近の状況について描く中で次のような記述を残している。

関西から流れついた小西組。大陸から引揚げてきた一部の無職の集団。言葉としてはどうかと思うが、当時の警察さえ使っていたアウトロウ集団。それに、一部の解放国民の群、彼らが既成の暴力地図と混じりあった。かくて異様な組織暴力地図が別府に生まれてきたのである。流れ者の博徒たち、テキヤ集団、特攻くずれ等の引揚げ兵士のアウトロウ集団、右翼、そして共産党も一部過激化していた。（鬼塚 2002: 28-29）

また、自身も引揚者として65年前に別府にやってきたある人物は、敗戦直後の別府のまちについて、「駅前通の繁華街の真ん中や海門寺公園に引揚者や在日がひしめいていて、このあたりには戦前からの有力者はあまりいなかった。移住者、引揚者はさぞ居心地がよかったですよ」と語っているが、こうした語りや、海門寺付近等で展開された状況には、温泉都市別府が持つアジールとしての性格を看取することが可能であろう。

近年、別府のB級グルメとして注目されるようになってきている別府冷麺は、こうした外来者によってもたらされ展開された食文化である。2010年現在、別府市内では20軒を超える飲食店で冷麺が出されているが、その歴史は、1946年までさかのぼる。

当時、満洲から別府出身の日本人妻とともに別府に来住した金光一氏（1924年全羅道淳昌郡生まれで少年期に渡満）は、海門寺マーケット（海門寺に形成された闇市が再編されたもの）の一角

で「アリラン食堂」を開店し、そこで冷麺を出した。これが別府冷麺のはじまりである。ただし、金氏はほどなく民族団体の専従活動家となって店を手放すことになる。だが、冷麺の系譜は途切れなかった。

すなわち、金氏が奉天でキャバレーを経営していたときの従業員で、ともに別府に移住してアリラン食堂の調理をまかされていた日本人の松本一五郎氏（久留米市出身で渡満していた）がこのとき独立し、ラーメン店「大陸」を開店。同店の主要メニューが冷麺となったのである。そしてさらに、松本氏のもとで修業した日本人が市内でラーメン店や冷麺専門店を開いていった。こうして別府市内に冷麺が普及したのである。別府には満洲や朝鮮からの引揚者が多く、冷麺を懐かしがったことも冷麺普及の一因らしい（なお、金氏も1964年に焼肉店を再開している（現在の「春香苑」））。

この場合、別府冷麺の出発が「別府カスバ」「魔窟」とされた海門寺であったところが興味深い。別府冷麺の事例は、外来者たちの混沌とした生活状況、都市別府が持つアジール性の中から新たな文化が創出されたケースとして位置づけることができるだろう。

2. 温泉都市伊東

伊東は、すでに近世期に「温泉番付」の上位に位置づけられるなど、広く知られた温泉場であったが、近代には、東京在住者の別荘地として開発されるとともに、多くの温泉旅館が創業し、温泉都市としての繁栄を迎えた。伊東の場合も、外来資本による旅館経営が広く行なわれたが、同時に旅館従業員や観光関連業種の労働者もまた多くが外来者であった（鈴木1958）。筆者の調査で出会った人々の語りから外来者の流入に関する部分を以下、紹介してみよう。

語り1：

伊東は、よそから多くの女性を呼び込んだ。大きなのは旅館・ホテルの仲居さんと東海バスのバスガイド。みんな地方から来ている。東北と北海道が多い（ただし、有名なAホテルの場合は経営者が九州出身のため、従業員も九州から大量採用していた）。旅館で働いていると、着るものと食べるものにはお金がかからないのでどんどんお金が貯まる。1,000万以上貯めたという人も多い。貯まった金で東北や北海道の実家に家を建てたという人も少なくない。金が貯まってから実家に帰った人もいるが、中にはそのまま伊東で結婚して住み続けている人もいる。

昭和36年に伊豆急行線が開通するまで、伊東から先の伊豆半島の公共交通はバスしかなかった。半島中に路線が張り巡らされており、そのため大量の女性車掌が必要とされていた。また、高度経済成長期には、観光ブームでバスガイドの需要も大量にあった。中学卒業と同時に（ただし、高卒者もいた）東北や北海道から採用された女子は、伊東駅近くの寮（のちに東海ストアというスーパーが建ち、現在は空地）に住み込んでアナウンスや歌の訓練を受けていた。自分は昭和40年頃、伊東の男子高校生だったが、その頃の男子高校生たちは、よくこの寮の前に行き、下から声をかけて女子と友達になり、休みの日に寮の外で会ったりしていた。

よそから入ってくるのは女性だけではない。男性にも仲居ほどではないが旅館の仕事があり、よそから就職先として伊東にやってくる者が一定数いた。（60代男性、不動産業）

語り2:

伊東と伊豆大島の間にはかつて定期航路があり、つながりはかなり深かった。わたしの母は、母の姉とともに大島から伊東の旅館に働きに来て、そのままここに居ついた。伊東には大島出身の人はけっこういる。
(50代男性・会社社員)

語り3:

御殿場線沿線（裾野市など）の農家出身者が伊東の旅館で働いたり、あるいは大工や左官屋などの職人として伊東にやってくるケースもあった。
(70代女性・主婦)

語り4:

(以下、栃木方言のアクセントで) なんでおれがここにいるかって? そうだよな、指名手配だよな(笑)。伊東の女につかまっちゃってきちゃったんだよね。ほんと、なんでここにいるんだろね(笑)。
(60代男性・タクシー運転手)

語り5:

母は佐世保出身。父は伊豆（伊東ではない）出身のトラックerだった。結婚して兵庫県に住み、その後伊東へ。伊東において離婚したが、母は親の反対を押し切って結婚していたため佐世保には戻れず、伊東で暮らしてきた。
(40代男性・タクシー運転手)

語り6:

伊東には山形出身者も多い。山形からみかん山に出稼ぎに来て、そのまま住みついたという人がけっこういる。山形からすると伊東は暖かくて過ごしやすい。中には自分でみかん山を経営するようになった人もいる。
(60代男性・会社員)

語り7:

静岡市や清水市から戦後に花卉栽培やみかん栽培のために移住してきた人たちがいる。逆川や長美代という地域に多い。またそうした中から造園業を営む人たちも出ている。
(60代女性・主婦)

語り8:

小学生のとき（昭和40年代）、両親といっしょに静岡市から転居してきた。あの頃は伊東の景気がものすごく良くて、仕事があったために一家で伊東にやってきたのだ。
(40代女性・主婦)

語り9:

伊東は、わけあり、流れ者のまちだ。みんな過去についてはあまり詮索しないで働いて暮らしてきた。自分は熱海にも住んだことがあるが、熱海も同じような感じのまちだ。こういうまちは、いままでだと仕事なくなるとみんなすぐによそに流れていった。ところが、これまで伊東や熱海で暮らしてきた人たちは多くが老人になってしまっていて、もうよそに移れない。

そのまま伊東や熱海で生活保護を受給しながら暮らすようになっていく人たちも多い。

(50代男性・日本料理店板前)

以上、伊東における外来者の流入にかかわる語りを挙げてきた。筆者は調査の過程でこれ以外にも類似の語りを多く聴取しており、これらの語りは伊東という都市の特性をよく表しているものと思われる。中でも語り9にある、「わけあり、流れ者のまち」「過去についてはあまり詮索しない」という表現は、伊東が持つアジールの性格をよく物語っているといえることができるだろう。

3. 「混浴温泉世界」から

20世紀末以来の経済の停滞の中で、別府も伊東もまちの衰退が著しい。これに対して、それぞれの都市は、再生のための試行錯誤を続けているが、そうした中で、別府において行なわれた「別府現代芸術フェスティバル 2009『混浴温泉世界』」（以下、「混浴温泉世界」。主催：別府市、別府現代芸術フェスティバル 2009 実行委員会）の試みは興味深い。

「混浴温泉世界」は、2009年4月11日から6月14日の間に別府市内で行なわれた。開催概要には次のようにある。

湯けむり、混在する聖と俗、移民文化。別府は至る所に不思議が顔をのぞかせる魔術的な街町である。2009年春、65日間にわたり、この地で多種多様なアートが展開された。鑑賞者はパスポートと地図を片手に、町に点在したアート作品を探しながら散策し、その途上で、別府という町が垣間見せる、様々な表情と出会った。

精神の旅へといざなう別世界への門＝「アートゲート」となる作品は、市内各所に点在し、国籍の違う8組のアーティストによって制作された。その「アートゲート」を鑑賞者が探しながら別府を旅する展覧会「アートゲート・クルーズ」を核とし、国内若手アーティストが古いアパートで滞在制作する「わくわく混浴アパートメント」、コンテンポラリーダンスが繰り広げられた「ベップダンス」、市内の特徴的な場所を会場とする音楽イベント「ベップオンガク」など、多彩なプログラムが開催された。（特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT 2010: 12）

「混浴温泉世界」の総合ディレクターであった芹沢高志は、この企画を、「アートの力を借りて、今ではグローバリゼーションとかジェントリフィケーションの名の元に抑圧されてしまった」別府の持つ魔術的な「場所の気配を、すこしでも解放したいとする試み」だったと述べているが（芹沢 2010: 14）、その場合、別府のまちの特性を、外来者（移民）と結びつけ、さらにこのまちや温泉そのものの持つ開放性や多文化性と関連させて論じている点が注目させられる。すなわち、

移民文化と言えど大げさだが、実際、この街を切り開いていった人々は、そのほとんどが外部からの流入者だった。四国からの人間も多い。外部からの人間を受け入れる土壌は、いまも健在で（中略）、移民たちの街と考えれば、住民たちの人なつっこさ、それでいて同時に存在す

るある種の不干渉や個人主義も私には腑に落ちた。(芹沢 2009: 17)

というのであり、また、

誰にでも開かれた温泉という在り方は、混迷を深める現代社会にあって、ひとつの希望とも言えるだろう。肌の色や国籍、宗教、貧富の差を超えて、さらには男、女という性の差も超えて、人は丸裸になり、それぞれの人生のひとつときを共有する。これは多様性を全面的に許容するきわめて平和的な多文化共生のユートピア・イメージだが、それだけではない。つまり、いくら気持が良かろうと、湯につかり続ければ頭がのぼせ、人は必ずここを出ねばならない。この出たり入ったりせねばならないという現実が私には新鮮で、混浴温泉という存在が、ひとつの世界の在り方に関するすぐれたメタファーになるのではないかと思われた。(芹沢 2010: 16)

というのである。

筆者はさきに、別府の都市形成には外来者の流入が大きく影響していること、またそこにはアジール性が見出せることを指摘したが、同様のことを、現代アートの世界に生きる人々が直感的に感知し、これをアートとして存分に表現したのが「混浴温泉世界」であった。

「混浴温泉世界」に刺激されつつまとめてみると、アジール性とは、新自由主義体制下にある現代世界においてオルタナティブな生き方を探求する際のある種の資源であるように思われる。こうしたものを具体的な都市の生活史の中に見出していくことも、「共生／移動」研究の一つの課題であるといえよう。

付記:別府、伊東と並ぶ温泉都市である熱海（および箱根）については、昨年刊行された武田尚子・文貞實『温泉リゾート・スタディーズ―箱根・熱海の癒し空間とサービスワーカー』（青弓社、2010年）が詳しい記述を行なっている。

引用文献

- 浦 達雄（2006）『別府温泉郷の観光地形成に関する研究』クリエイツ
- 奥井智之（1996）『アジールとしての東京―日常のなかの聖域―』弘文堂
- 鬼塚英昭（2002）『海の門―別府劇場哀愁篇―』私家版
- 鈴木富志郎（1958）「観光都市における人口移動―静岡県伊東市の場合―」『都市問題』49-12
- 芹沢高志（2009）「触媒としてのアート―別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』を巡って―」『アートマネジメント研究』10
- 芹沢高志（2010）「次を夢見て、アートゲートは閉じられる」『混浴温泉世界―場所とアートの魔術性―』河出書房新社
- 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT 2010『混浴温泉世界―場所とアートの魔術性―』河出書房新社